

第1回インターメディアット世界選手権  
(米国カリフォルニア州リバーモア 7月30日～8月5日)



ワールドシリーズ決勝

8月5日(月)球場: Max Baer

開始時間16:00

	対戦カード	1	2	3	4	5	6	7				計
①	日本(泉佐野)	0	0	1	7	0	1	1				10
②	ペンシルベニア州	0	0	0	0	0	0	1				1

①	投手	島邊				
	捕手	小坂				
②	投手	●Serafino	Alauzen			
	捕手	Yukawa				
	本塁打	—				
	3塁打	—				
	2塁打	小坂				

[戦評]

好機を逃さない日本の集中力はすごかった。3回に敵失から出塁した島邊はすかさず二盗し、2死後、宇佐美が中前タイムリーでまず先制。続く4回は先頭・村野の中前安打から四球と内野安打で無死満塁とし、このチャンスに田中天、湯川祐の内野安打、さらには金谷、宇佐美の連打などで一気に7点を奪ってしまった。

出塁すれば果敢に盗塁し、得点圏に走者を置いて後続が好打で迎え入れるという機動力と打撃力がうまく絡み合った攻撃は泉佐野の大量得点パターン。

そればかりではない。2回裏、先発左腕の・島邊が安打と味方エラーで無死二、三塁のピンチを迎えたが、ここで島邊は踏ん張り、連続三振から投ゴロに打ち取って危機を回避。その後は打たせて取る丁寧なピッチングで6回まで長身の米国打線をわずか1安打に抑える好投。最終回は1点を献上したものの、完投で優勝投手の名譽を手に入れた。

日本はここまで4試合ですべて2ケタ得点、うち3試合がコールド勝ちで相手に付け入るすきを与えない内容で、第1回王者として“格”の違いを見せつけた。

[談話]

◆北谷敏寿監督「このチームは世界一強運を持つチームで私は世界一のラッキーボーイです。相手は決勝までくるチームですから相当な力を持っているし、タフな試合になると思っていた。でも、選手たちは集中していたし、それがきちんとできたのがこの結果だと思います。島邊もコーナーをついて打たせて取る投球で持ち味を出しました。この地、リバーモアに感謝したい。地元の人の方が支えてくれました。一生忘れられない思い出となりましたが、来年チームを再編してもう一度この大会に戻ってきたいです」

◆小坂泰斗主将「世界一になれてうれしいの一言です。監督、コーチをはじめみんなが一つになって優勝できました。外国チームはパワーがありました。個人的にはあまり打てなかったのが悔しいですけど、地元の人々の応援もうれしかったことは